
チートオリ主のナデシコ生活

朽葉 周

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チートオリ主のナデシコ生活

【Nコード】

N5721X

【作者名】

朽葉 周

【あらすじ】

SFっぽい世界観で火星に生まれたと思ったら、地球と敵対していて核攻撃された。な、何を言っつて（ry。機動戦艦ナデシコの世界にTS転生したオリ主がニワカ原作知識とご都合主義の補正を使って適当に生きていくお話。二次創作、または設定の矛盾などに嫌悪感のある方は、「ブラウザの”戻る”等でお戻りください。

00 幼女、大地に立てない

転生チート、というのがある。

転生チート。簡単に言うくと、前世の知識を持ったまま転生 新しい人生を得る、と言うものだ。元々転生という言葉自体仏教用語で正しい用法ではなく、コレは一種のネットスラングと言うやつだ。主にネット上の二次創作活動などで使われていたりする。

で、何故俺が冒頭からこんな切り出しをしているかと言うと、まあネットの二次創作ではよくありがちな展開なのだが、どうやら俺はその転生と言うものをやらかしてしまったらしい。

考えても見て欲しい。朝何時ものように起きようとしたら体が動かず、声を上げようとするとその全てが泣き声になってしまうのだ。

で、その内見知らぬ美女が慌てて飛び寄り、おもむろに此方に乳房を寄せて と、そんなノリなのだ。

うん、まさか俺がこんな良くある二次創作みたいな展開に巻き込まれるとは思わなかった。

だが、あえて言わせて貰おう。「どんな羞恥プレイだ」と、「役得」の二言を。

さて、そんな俺なのだが、どうやら今生は女性としての生を得たらしい。何故らしい、などと言う不明瞭な言い方かと言うと、いまだに自分が女性として生を受けたという事実を幾分か受け入れられていないという点が大きいのではないだろうか。

いや、な。こう、数十年男として生きてきた記憶があるのに、ある日突然女の赤子として転生したのだ。当然違和感はある。といてもまあ、今年で俺も六歳。そろそろこの肉体に感じる違和感と言うのも小さくなってきている。

肉体に魂が引つ張られる、と言うやつなのだろう。嘗ての厨二病で得た痛々しい知識が火を噴く。

段々と女性としての自分に違和感が無くなっていく。その事を自覚して、恐怖半分諦め半分。何せ今の俺が女性と言う事実は如何足掻こうが覆らない。女兒としての生を受けたのだから、コレもまた必然かと、そう考え諦めた。

然し、問題は这个世界だ。22世紀初頭らしいのだけでも、なぜか俺は火星の大地に立っている。そう、俺は火星生まれの人間なのだ。

うん、火星生まれ。意味が解らない。これがどこぞの魔法溢れるファンタジーな世界だとか、現代の裏側に潜む闇だとか、そういう類ならまだわかる。が、火星ってなんだ。

私は良くある「胡散臭い神様と契約して〜」という類の転生ではなく、単純にこの異世界に転生してしまったタイプの人間だ。もしかするとこの世界は、単純に前世の直縁上にある世界なのかもしれない。何せ母星が地球で暦が西暦なのだ。

いやしかし。嘗て私が生きていたのが21世紀初頭。ソレに対して今現在は22世紀初頭。たかが100年未満の間に、火星にテラフォーミングを施せるほど、人類の技術と言うのは爆発的に進歩する物だろうか？ まあ、嘗てのPC普及を見ていればソレもありえないとはいえないのだけれども、流石にコレは規模が違うだろう。

このトンデモ進歩具合から考えて、流石に嘗ての直縁ではないと考える。

では、展開的には何等かの娯楽作品系の世界にでも生まれたのだろうか。然しその場合、俺はあまり知識を持っていない。アーサー・C・クラークの作品なんて読んだ事もないし。

さて、だとするとこの世界は難だろうか。俺の持ちうる知識で、火星が舞台と成った作品とは……機動戦士な種死の外伝とか？ 後はフロムなソフトウェアの出してるソフトとか。その位しか思い浮かばないな。

で、仕方が無いので、とりあえず情報収集と両親の話にこっそりと耳を立てることにした。どうも我が家の両親はかなり良心的な御仁らしく、子供の前では滅多に政治的な話はしないのだ。

で、夜、こっそりと両親の会話に耳を立てていたのだが……。

「どうも連合政府め、我々を月から追い立てただけでは飽き足らず、この火星の地にまで手を伸ばそうとしているらしい」

「アナタ……」

「時雨、近いうちに此処も戦場になるやもしれん。そのときは吹雪をつれ、急ぎ避難船に逃げるのだぞ」

「はい……でも、アナタも無理はなさらないで」

「ああ……」

と、その後はおアツいシーンとなってしまうので、元の私に与えられた寝室へと踵を返した。

さて、判明した事実を纏めると、

1. 元々両親は月に住んでいたらしい。
2. すったもんだの末、月を追い出されて火星に移住したらしい。
3. で、どうやら敵である連邦とやらは、此処に対する攻撃を狙っているらしい。

……あれ？ この状況、何か知ってるような？？

うん、なんだったか、この状況。確か、ゲームじゃなくて、アニメ……うん？

月の独立戦争で敗北して、火星に移住、で、核を打ち込まれて木星………っ！？

まさか、真逆真逆、この世界はもしかして、

「機動戦艦ナデシコ」

の世界なの……か？

俺この世界ニワカだよ！？

00 幼女、大地に立てない（後書き）

カッとなって書いていたらある程度溜まってきたので掲載

と言うわけで、どうやらこの世界は機動戦艦ナデシコの世界に間違いないらしいです。ナンテコツタイ。

俺の覚えているニワカ知識が確かなら、この後火星には核弾頭が打ち込まれるはずなのだ。

まあ、だからといってソレを私に如何こうする事は出来ない。何せ私はただの子供。子供が「核弾頭が打ち込まれる」なんぞ言おうものなら、間違いなくその両親は私を病院へ連れ込むか、周囲に不穏な情報を流布する怪しい存在が居ないかを調査するだろう。間違いなく病院に連れ込まれて隔離。

で、為らば俺に何が出来ると言っていると、後顧の憂いを絶つことくらいしか、私がこの世界に出来ることなんていうものは思い浮かばない。

幸いと言うかご都合主義と言うべきか、俺の住むコロニーは現在火星の極冠に程近い。乗用車で移動すればほんの少しの時間で極冠にたどり着くことも出来るだろう。

いや、遺跡を発見できるか、と問われれば、ワカラナイとしか言い様が無い。

然し、コレでも俺は現実来訪方の転生者、と言うジャンルに属する人間だ。多少のご都合主義くらいは神も御目溢しをくれるのではないだろうか、などと軽く考えて。

とりあえずとばかり、その日の晩の内に早速盗んだ小型乗用車で極冠へ向けて走り出した。

何せ私は火星生まれの六歳児。原作で木連がどれ程の月日を火星で過したかは明言されていなかったように思うのだが、流石に6年も戦争状態を維持し続けるというのは考え難い。戦争って継続するだけで結構お金掛かるからね。

つまり如何いう事かと言うと、痺れを切らせた連合が何時核を打ち

込んできてもおかしくない、という事だ。

私も一応火星生まれ。出来るなら、演算装置を何処か遠い宇宙にジャンプさせるか、もしくは破壊、出来ずとも装置その物を寄り見つけりにくい状態にする、などの手段が考えられる。

といっても、俺に出来る破壊手段なんて、考えられるのはこの乗用車を特攻させるくらいしか考え付かないのだけれども。

で、今現在直感にしたがって適当に火星の大地をドライブしている。着衣は自分用の宇宙服を。テラフォーミングが未完成な火星では、生活用コロニーの外に出る際は当然ながら宇宙服を装着しなければならぬ。うちは幸い金持ちなので、一家全員分の宇宙服が家庭用スペースに備え付けられているのだ。父君様様と言うところだろうか。乗用車はお隣さんの物を拝借した。お隣さんの長男は自らパワーローダーを作る趣味の人で、この乗用車も当然彼の魔改造が施されている。なに、未だ幼女であるこの身だが、嘗て軍の放出品のパギに乗っていた俺からすれば、魔改造品とはいえ、電気式のエレキなんぞ玩具に過ぎん。例えソレを操るのが幼女の身であろうとも、な。

とか考えながら乗用車を走らせていたのだが、なにやら微妙に計器類が狂いだす地点があることに気付いた。前世から現世に転生した身としては、現世の進んだ科学には大変興味を引かれる。そんな俺だからこそ、私物として多くの携行機器を身につけている。そのうちの幾つかが、磁場の異常や磁気嵐、様々な電磁波の異常を訴えていたのだ。

真逆早速アタリかと冷や汗をかきつつ、直感に従い更に乗用車を飛ばす。と、その内可視光すら狂い出すという有様。余りにもあんまりなこの事態に、思わず溜息が零れるのは罪ではなからう。

いや、確かにご都合主義を望んだのはこの俺だ。だが、なあ……。幾らなんでも、コレはないだろう。

目前には、氷付けの地面から突き出す肌色っぽい尖った何か。

厭さ、確か演算ユニットって火星の極冠で凍り付いて埋まってるんじゃないかって？ 何でこんなところに一部露出してるとんだ？ いや、俺の目的からすれば、コレに少し土なり氷なりをかぶせて見つけにくくするだけで済む筈だ。そう、此処に何かがある、という事にさえ気付かれなければ、誰が好き好んで極冠の凍りついた大地の下なんぞ好き好んで調べるといふのか。

小さく頷いて、早速と取り出したるは、宇宙用の作業ポッドなどに使われる簡易燃料缶と、父親から護身用として渡されている小型のデリンジャーレーザー。コレをこの露出した演算ユニットにぶつければ、いくらかの爆発を起こせるはず。そうなれば、その影響で演算ユニットは更なる氷雪に覆われ、遠く発見される機会は遠退く筈……。

うん、ボソンジャンプとか言う技術は遠のくが、まあ遠い未来に起こるであろう大量虐殺の所以が一つでも減れば、もしかすると未来は少しでも良くなるのかもしれない。

「悪いが、貴様には人類の為沈んでもらう。……悪く思うな」
そう呟いて、何と無くその角をペチンと叩いた。

……どうも、あっさりとソレが見つかったことに気が緩んでいたらしい。

突如として幾何学模様には輝きだしたその演算ユニットの端。その光は急速に輝きを増し、気付けば実体のない引力を発しだしていて。

「ぬあっ！？ 不覚！！」

必死に抗おうとするも、抵抗空しく、俺の軀は演算ユニットの角がこの発する強力な引力に引かれるがままその傍へと引き寄せられて「って、何いつ！？ か、身体がつ！？」

なんじゃそりゃと思わず叫ぶ。遺跡の演算ユニットの発する白い光。その、光の濃い部分が俺に触れた途端、俺の軀のその部分が痛みも無く消滅……いや、分解されたのだ。

コレにはさすがの俺もかなり焦る。何しろ、俺の知る限り、ボソンジャンプと言うものはこんな徐々に身体が消えるような跳び方はし

ないはずだ。若干のタイムラグが存在するとは言いが、ソレも精々一秒未満といったレベルのはず。しかも私は今現在、ボソソジャンプに必須であるチューリップ・クリスタルという触媒すら所持していないのだ。

……厭待て、チューリップ・クリスタル……。ココと言うものは、確か極冠遺跡の組成を人工的に再現した物、だったか。だとすれば、此処には遺跡そのものが有るわけで……。

ちよ、おま、洒落にならん!!

慌てて身体を引き剥がそうとするのだが、どうにも遺跡の持つ引力は洒落にならないレベルで、如何足掻こうと俺の軀がその角から離れる事は無く。

徐々に光に浸食されて消え逝く身体。真逆この様な終わりを迎えるとは、流星に想像だにしなかった。

思わずほろりと涙を流して、次の人生を想って目を閉じたのだった。

02 厨二病的チート超人幼女爆誕

つまりは、俺はどうやら生き延びたらしい。いや、正確には死んで別の存在として再誕したというか。俺にもなんとも説明し難い。と言うのも、今さっき気付いた私の中にある奇妙な知識と記憶。コレが、私がオリジナルの私でないという証拠になるらしい。

順番に語ろう。

先ず私が遺跡に触れた後のこと。あの光に飲み込まれた私は、どうやらボソソジャンプを行ったというよりは、演算ユニットに飲み込まれてしまったらしい。

演算ユニットとは言うものの、あれは単なる演算装置と言うだけではなく、周囲の環境情報の計測やら、様々な情報を常に取り込んで記録したりもしているのだそう。知らんけど。で、その収集記録の一環として、「人類」のサンプルを取った、と言うことらしい。で、サンプルとして採取されてしまった私のだが、どうやらここでもご都合主義が発生したらしい。

どうやら俺は如何言った因果かは知らないが、演算ユニットの有する自己保存機能が働いたとやらで、俺と言う形を持つ生体演算ユニットとして再誕したのだ。

まあ、蛇足なのだが、遺跡に取り込まれた際、何か金眼の幼女に色々愚痴られたような記憶がある。三千世界でバッドエンドを迎えるテンカワを助けたいたどか、助けたらその結果自ら（演算ユニット）を破壊されそうになり、その防衛活動として自動的に起動した防衛機構でテンカワを潰しちゃう事幾星霜、過去に飛ばせば心が磨耗してつぶれて、別人に移せばどちらにしろ因果に巻き込まれ、しかもやっぱり結果的に演算装置を壊そうとするか何等かの悪影響を及ぼそうとするものだから、今回の歴史では予め破壊されても転移システムに欠陥が出ない様、バックアップを作成する、という行動に出

るといふ選択が採択されたい。

因みにこれら平行世界の情報や、バックアップ作成の採択などは次元連結システムのちよつとした応用で演算ユニット同士で決めたい。いいのだろうかそれ。

まあ如何言う事かと要約すると、今の俺は、俺と言ふ意志を持ち、その意志の元で火星の演算ユニットと同等の演算能力を持つという一種のモンスターに成つたらしい。

正直、やらかした。つまり今の俺は、何の制約も無くボソソジャンプを駆使し、それどころか単身でディスプレイションフィールドを張ることすら可能で、更に件のIFS強化体質を上回る演算能力を常備しているらしい。その上遺跡の演算ユニットとは完全に乖離した存在であるが為、遺跡演算ユニットに依存することなくボソソジャンプが可能。であるのに、同じ演算ユニットという特性上、遺跡の演算ユニットで行われるボソソジャンプに干渉が可能、とか。

なんだろうか、この「ぼくのかんがえたさいきょうしゅじんこう」みたいな設定は。正直、人の身である俺には、この能力は些か過分すぎる。

しかも何だ。肉体は最盛期までは成長し、最盛期に至つた時点でその状態を常に維持し続ける？

つまり二十歳くらいで老化が止まって不老、と？

……厨二臭いなあ。然し、文句は言えない。何せ最悪の場合、俺はあのまま収集データの一つとして遺跡に取り込まれて、其処で終わつてしまつていたかもしれないのだ。どうやら俺の再誕には古代の火星の人の介在も有つたらしい。生きている事を喜びこそすれど、文句を言うのは些か見当違いだろう。あと、遺跡からテンカワの援護要請を頼まれたような気がする。原作介入時には100歳前後かあ……。

まあ、いい。その事は後回しだ。肝心の遺跡演算ユニットがどうなつたか、と言ふ話。

どうもあの演算ユニット、私の意志を感じて身の危険を感じたか、

それともただの偶然か、私をボソソジャンプで自宅へと送り返した後、如何やってか自ら何かをやらかして、氷の下へともぐりこんだらしい。

と言うのは、今朝方自宅の自室のベッドの上で目覚めた私が、色々パニックになって、少し落ち着いたら後、今度は父君がなにやら慌てだしたのだ。

で、何時ものように話を盗み聞きしたところ、極冠のほうでなにやら不明瞭な熱源が観測されたのだ、とか。

その時点で一息ついていた私は、自らの能力把握の一環として、ボソソジャンプで昨日火星の演算ユニットが露出していた地点へとボソソジャンプを敢行した。当然、第三者に見られた場合を考え、全身を白いシートで覆って。

で、ジャンプした結果、昨日まで其処に露出していた筈の遺跡演算ユニットは何処にも見当たらず、ただ真新しい氷がはる大地があるだけだった。

「其処の貴様！ 何故こんな場所に居る！！」

で、其処に佇んで呆然と地面を見ていたら、突如背後からそんな声が掛かった。慌てて振り向くと、どうやら調査に来た部隊の先遣隊らしい。

白い大地の上で白いシートを被ってるのに何で気付けるんだろうか。やっぱり宇宙に出た人類はNT覚醒するんだろうか？

等と下らない事を考えてしまう程度に慌て、再び自宅自室へとボソソジャンプ。先遣隊の彼には、私が突如消えたかかのように見えるだろう。

まあ、まだボソソジャンプのボの字も無いような時代だ。彼一人が騒いだところで、何かの見間違い、で済む……済めばいいなあ。

とりあえず俺は何時も通り、ただの幼女を装いながら日常生活に復

帰することにした。

暫くの間、父上殿の周りでは矢張り俺の行動の影響が少し騒がしくなりはした様子だったが、まあだからといってこの緊張時に幽霊騒ぎに大人数を裂くわけにもいかない。

然し、コレがもしかすると連邦のスパイの目撃談かもしれない、という事で暫くの間警邏を強化するとか何とか。まあ、治安の向上はいいことだし？

で、俺は何をしているのかと言うと、今後を見据えて色々和小細工をば。

と言うわけで、結局始末する事叶わなかった遺跡だが、まあ氷の奥に沈んでいった以上、そう簡単には干渉も出来まい。結果としては、俺が痛々しいチートオリ主化しただけで終わってしまった。

「ん？」

とか、思っていたらなにやら不意に背筋が粟立った。

何処かで何か巨大なエネルギーが爆ぜ、同時に数十万の命が消し飛んだような、そんな間隔。我ながら厭に具体的に思い浮かぶその感覚。これは 多分、間違はなく、核なのだろう。

突如として消え去った幾万の命の空白に少し気分が悪くなる。

「あら、吹雪、どうかしたの？」

「……おかあさん、避難しよ」

言いつつ、手早く鞆を取り出し、必需品を纏めて背負う。幼女の必需品など数が知れているので即座に用意は整う。次いで、戸惑う母親の代わりに手早く荷物を纏める。衣類下着一式と、医薬品に保存食に……あああ、いかん、この後の事を考えるとどうしても憂鬱になる！ 誰がこの後苦難の放浪が始まると解っているのに嬉々としていられるのかっ！！

と、どうやら俺の必死の様子からただ事ではないと理解してくれたらしい母は、私の横に並んで身支度の準備を始めた。

というか、さすが御母堂。幼女な俺の手際よりもよっぽど手早く荷物の準備を進めていく。

なら、私も少し自分用のお仕事を進めさせてもらおうとしよう。

部屋の一角に置かれた端末　俺の自作の端末で、簡易IFSとでも言おうコレは、生体演算装置である俺にしか使えない、低性能なIFS端末だ。何せこの時代、まだIFSとか普及していないからなあ……。

コードむき出しの機械類、その中でも銅線がむき出しの一角に両手を突っ込み、システムを掌握する。この家のLAN、次いでこの区画のネットワーク、次いで火星全域、火星衛星帯　と来たところで、漸く目的の映像が得られた。火星本星の陰から薄らと見える爆炎。それは、間違いなく戦争の光だ。

どうもこちらの避難を遅らせる為か、地球連邦は此方の情報網を麻痺させて、一つ一つ確実に此方を消し飛ばす心算らしい。

慌ててその情報を各火星軍に散布。3分ほどして火星全域に避難警報が流された。

さて、いよいよ火星脱出なのだけれども……はあ。

私も、火星の演算ユニットのコピーを得てから、色々と手を打っておいた。火星独立軍部の情報に情報操作を行い、予め避難船の準備をさせて置いたりとか、食料の積み込みだとか。

……いつそのこと、軍用の補給艦の一隻でも奪取して、資源移送用にでも利用するか？

ふむ、咄嗟に思い浮かんだにしては、中々いい案のように思えてきた。幸い此方にはIFSモドキがある。この時代の戦艦のセキュリティキーくらいなら、軽く突破できるだろう。

と言うわけで、早速連邦軍のシステムに火星の警戒衛星網を経由してハッキング。というか、このまま電子掌握すれば此処で話は終わるんじゃないか？　なんて一瞬考えたのだけれども、どうにもシステム自体が古すぎて、電子掌握した程度では収まりそうにも無い。

何せ相手は手動でミサイル一発放てばいいだけなのだ。射線なんて、惑星が自ら自転しているのだ。態々自分から射線をそろえる必要は無いだろうし。

という事で、ハッキングして、まだ殆ど物資を使っていない後方の補給艦を一隻完全に掌握する。矢張り古すぎるシステムで、完全に掌握するには手間が掛かる。

危うくシステムを取り戻されるところだったが、何とか艦に設置されていた対艦内用鎮圧システムを作動させ、艦内の人間を強制的に鎮圧。その後艦内にジャンプし、艦内で鎮圧されている連邦軍の皆様を強制ジャンプで掃除した。まあ、演算ユニットの影響を受けているわけでも、IFSによるイメージング補正を受けているわけでもないの、まともにジャンプできるとは思わないが……元々火星に核を打ち込むような連中だ。胸は痛まん。

準備が時点でウチのシャトルに乗って火星を離脱。ウチってなんだか割りの良い家計らしく、プライベートなシャトルを持っていたりするらしい。母の操縦で大気圏を離脱し、軌道上に待機している火星軍の難民船へと合流しようとする母だったが、ソレを一先ず抑える。何せ此処から艦隊に合流しようと思うと、一番近いのは艦隊のど真ん中を突っ切るコースなのだ。では遠回りすれば良いのだが、残念ながらこの民間用シャトルに其処までの性能は無い。大気圏を個人で離脱するだけでも、精一杯の高級品なのだ。

と言うわけで、乗っ取ってこっそりと戦列から離れさせた補給艦の敵味方識別信号を民間の物へと書き換えて、母の操縦するシャトルにガイドビーコンを発信させる。

当然母はそんなものを気に止める心算もなかったらしいのだが、私の説得により何とか補給艦へと向かうルートを選んでくれた。

で、目の当たりにした補給艦は連邦軍の物。当然母は慌てて引き返そうとしたものの、アレは既に此方が掌握しているから大丈夫、などと説得して乗艦。

母は半信半疑ながらも、どうやら本当にこの船が無人艦であるという事を確認した瞬間、一体如何やってこんな事をしたのか、と氣勢良く此方に問い詰めてきた。ハッキングして隔壁を開放したまま外部ハッチを全て開放してやっただけ、と答えたら、母は若干顔色を

悪くしていた。で、「その事は他の誰にも喋っちゃ駄目よ?」と。まあ、誰にも言うつもりはありませんが。

そういうしている内に、補給艦の艦橋にたどり着いた。うーん、古い。

持ち込んだISFモドキを設置して、一応俺一人でも操縦できるように改造してみるけど……うーん、完全掌握には少し時間が掛かるかな? 電子系と機械系が完全に同期していない。やはり元のシステムが古すぎて、ワンマンオペレーションは無理の様だ。

それでもまあ、操舵を行うには十分だろう。

とりあえず格納庫に積まれていた無人船外作業ロボに指示を出し、艦体のカラーリングを変更するように命じる。とりあえず、黄色と黒で作業用っぽいカラーリングに。で、艦自体の敵味方識別信号は元々乗っていたシャトルの物に変更して、漸くこの段階で火星軍の難民船へ向けて移動を開始した。

まあ、補給艦と言う性質上、移動に掛かるコストはかなり低い。コシなら、まあ、火星までなんとかたどり着ける……かな?

02 厨二病的チート超人幼女爆誕（後書き）

改行してないから読み辛い……。
後で推敲するかも。

03 漂流少女MANIAX

と言うわけで、アレから数年経ち、現在木星方面へ向けて漂流しています。

ええ、そうです。漂流です。

当初難民船団は火星を盾にそのままスウィングバイ、重力の勢いに乗って惑星軌道を大回りし、こっそりと月にでも忍び込もうか、という計画を立てていたそう。

ただ、実際にはスウィングバイの途中で連合艦の攻撃　追撃を喰らい、その爆装の勢いで軌道がずれ、勢い良く木星方面へ向けて吹っ飛んでいる最中、という感じだそうです。

因みにどうも狙ってやられたみたいで、殆どの艦がスラスターにダメージを追って反転不可能。そもそもスラスターがあつたところで、一度付いた加速はそう簡単にはとめられない。最早そのまま漂流するほか選択肢と言うのは無いのだろう。

で、近況報告ですが、ついに来ました。あれが。女性特有のヤツ。

幸い私のは軽いほうらしいのですが、憂鬱になるはイライラするはと最悪な気分です。

その上どうにも意識が肉体に馴染んできたらしく、気付けば一人称が俺から私に変化していました。いや、母様の教育の成果と言う可能性を否めないでもないのだが。

さて、そんな感じで現在木星方面へと漂流中の私。現在の私の立ち位置は、漂流中の難民船全体の便利屋、といったところでしょうか。手に入れた補給艦　ミデアと名付けたこの艦ですが、まあ手に入れた経緯に関しては色々聞かれましたが、周囲には私の事を「天才的ハッカー」とかそういう風に言っただけ誤魔化しました。実際「天才的幼女ハッカー」とか意味不明。

手に入れたミデアですが、当初旧火星軍がコレを徴集しようとした。私としては自ら鹵獲した物で、若干惜しくはあるものの、ま

あいいかと軍に渡す事自体は特に忌避感を感じていませんでした。何せこの艦の物資含む全ての物資は、既に個人的にリスト化しているので、配分を偏ったりすると確実に解ります。

で、艦を明け渡したはいいものの、その直後にこの艦を私に返還する、と言う動きが出てきました。なぜか、と問うと、どうも彼等だけでは船外作業用のロボットを制御しきれないからだそうです。

全く持つて不甲斐無い。これだから脳筋の軍人は。整備班とかそういう類の人間は如何したのかと聞いたところ、現在移民船の各所で船の修理に明け暮れているのだとか。

で、何故私に返還するのかと言うと、私が一人でこのロボット達を操れるという事を何処かから聞いたらしく、「なら取り上げて宝の持ち腐れにするより、本人に任せてよく運用してもらおう」とか言い出したのだとか。正直阿呆かと、軍人が何を甘えた事をとキレかけましたが、まあなんとか我慢しました。

折角返してくれるというのですから、ありがたくお返しいただきました。まあ、彼等がロボットで何を仕様としていたのかと言うログを見ると、どうやら黄色と黒で作業用機械っぽく仕上た外装を塗りなおそうとしていたようです。本音は、この外装が恥ずかしかったから、と言うところでしょうか。真ツピンクにでも塗装しておくべきでしたかね？

まあ、と言うわけで現在、私はこの艦とオートマトンを率い、難民船全体のライフラインの整備なんかを受け持っています。

いや、実にラッキーな話、この艦初期型ではあるが、IFS対応端末とナノマシンを積荷として幾つか積み込んでいたのだ。道理で古臭い割にはIFSモドキが使えたわけだ。まあ、かなりの初期型で安全性には幾ばくか不安がある。ま、端末のほうは私が廃材で作ったソレよりもマシンなので、コレ幸いと利用させてもらっている。まあ、この端末がしまわれていたという事は、矢張り地球のナノマシン嫌いらしい。こんな過去の時点で既にIFSに対する拒否感情があるのだから、地球の偏見って言うのも相当だなあ。

さて、現在の状況はこんなところですが、今現在難民船にてついにあの病気が発症しだした様子です。

そう、序盤ネタとして登場し、後半まさかの重要ワードにまで昇り詰めたあの作品。

「ゲキ・ガンガー3」

全く持つて意味不明。いや、愛と正義を馬鹿にする心算はありませんが、どうしても其処まで熱を入れられるのか。逆に尊敬してしまいません。

……いや訂正。間違ってもあんなのを尊敬したくは無い。

連中、既にどこぞの宗教組織の様相を呈している。恐ろしい事にゲキガンガーは難民船全体に行き渡り、難民船どころか護衛の旧火星軍艦にまで堂々と浸食していた。

これは多分だけど、移民船に逃げ込んだ人たちと言うのは、普通に考えて娯楽物なんて何も持つてこなかったのではないだろうか。で、その中に偶々ゲキガンガー全巻を持っていた人物がいて（多分軍人）、件の幾つかの欠番とやらも確り存在している。

まあ、このまま放置すれば、確かにゲキガンガー馬鹿が量産されるのだろう。

然し、甘い。

此処には、この場所には、この私、今生での名前は桜庭吹雪がいるのだ。私の目の黒いうちは、唯々馬鹿のように正義を繰り返すだけの作品なんぞを推奨させはしない。と言うわけで早速行動を開始した。

メディアを中心に移民船団の中に放映チャンネルを一つ開設。通称アニメチャンネル。

此処では、私が今生で収集し続けた様々なアニメが放映される。朝方に子供向けの番組Yを流し、昼間に女性向けのドロドロした恋愛

物を流し、夕暮れにロボット物を流して、深夜にちよつとエッチいアニメを流す。当に完璧。さすが私。

因みに私のアニメ評価の基準は、シナリオ、作画、声優と、大体この三点で選んでいる。その点で考えると、私的には「ゲキ・ガンガ13」は駄目だ。最終回で精霊会議とかマジアリエナイ。そんな作品を推奨する軍部とか、キガクルツテルトシカオモエナイ。

とまあ、そんなわけでゲキガンガー汚染は移民船団の約3割くらいに抑えられた。後の七割は、大体子供が朝と夕方、青少年達が深夜〜といった感じらしい。まあ、三割のゲキガン馬鹿はその大半が軍人らしいのが痛々しい。まあ、「赤い兄貴の背中」を見せた所為で大分汚染は食い止められたのだが。正義って何だろうね。

で、ゲキガン汚染をなんとか食い止めたのはいいのだが、これにそのほかの年代の皆様（主に主婦の皆様）から苦情と言うか要望と言うかが飛び込んできた。

曰く、「私たちにも娯楽を」だそうだ。

いや、んなことを私に言われても知らんがな。私はあくまでも手持ちのアニメーションデータ（数千テラバイト）を放映しているだけなのだ。

ご夫人ご老人の娯楽ってなんだ？ 演歌？ 園芸？ ドラマとか？ いや、手持ちに無いから。私ぴちぴちの10代前半です。

で、仕方なく、今回のアニメ放送に関わってくれた有志の皆様にご相談したところ、ならいつそのことテレビ局でも作るうぜ、という流れになっちゃった。

全く持つて意味が解らなかつたのだけれども、機材を使わせてくれるだけでも良い、といわれたので、ならばご自由にどうぞ、と行ってしまったのだ。

その翌日、移民船団の中に、STK（桜庭テレビ協会）なる新興企業が設立されたのだが、なぜか私が総株主だったりして、本当に意味が解らなくなりだした。

03 漂流幼女MANIAX（後書き）

ミデア

黄色くてよく落とされるあれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5721x/>

チートオリ主のナデシコ生活

2011年10月22日01時28分発行